
三題話

月島 真昼

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三題話

【Nコード】

N6491S

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

適当に三題話を書いていく。お題随時募集中なり。

鴉 布団 ヨーグルト

冷蔵庫を開けてみた。安かったから買いだめしたヨーグルトが腐っていた。

「うん、非常にまずい」

この四月から大学に入学し、一人暮らしを始めたのだが金の使い方をすごく間違えた。というのも金を借りたまま返さないあの腐れ先輩がすべて悪いのだけど。

仕送りは来月の初めの金曜日。今日は五月二十二日。所持金は千二円。腐ったヨーグルトの他には、米と醤油しかない。腹が減った俺はヨーグルトの蓋を開けてみた。すぐに開けるべきじゃなかったと後悔した。酸味の強い激烈な匂いを放っている。鼻が曲がる。ビニール袋に放り込んでしつかり口をくくりゴミ箱に放り込む。それでもまだ部屋に匂いが残る。窓を全開にして空気を入れ替える。

「……なんつーか、短絡的なんだよなあ」

昔から計画を立てて何かをすることがひどく苦手だった。思えばこの思考回路のせいで損ばかりしてきた気がする。

詐欺にあったり。

知り合ってすぐの女の子を好きになって次の日に告白したり。

先生をぶん殴ったり。

一人暮らしなんてまだ早かったのだ。金を貸して戻ってこないことを覚悟しないやつは、社会人として未熟なのだろう。

どっかのえらい人も言っていた。金を貸してはいけないし、借りてもいけない。どちらにしても信用を失う。だったっけ。

「はあ」

さて、この腐敗物をどう処理しよう。

俺は布団を見た。

金髪がはみ出ている。

ヨーグルトそっくりの匂いを撒き散らす液体が布地を濡らしている。

鴉が一羽部屋に飛んできて、その目玉を銜えた。？み込んで、俺を見て逃げていく。

「短絡的なんだよなあ……」

適当 連日満員の映画館 猫なで声

ふむ、これが話題の超大作らしい。連日満員で、予約とつてなかった昨日は観れずに、俺の貴重な休みは二日とも吹き飛んだ。

カラメル味のポップコーンを右手から口に運ぶ。ついでに隣の彼女の横顔を見た。キラキラしてる。うん。何がおもしろいんだろう、これ。CG技術は確かにすごいし、SFチックな要素もよくできていると思う。けど光ってる剣をぶんぶん音を鳴らして振っているのを見て、一気に興ざめになってしまった。あれかなあ。西尾維新さんいわく殺気みたいなものを察知できるせいで銃器は廃れてるのかな。なんかその手の説明出てきたっけ。

正直、彼女と俺は映画の趣味が合わないと思う。俺はあれなんだよ、コメディ系とか日常系が好きなんだ。彼女はお涙頂戴な「死ぬまでをどうすごすか」とか、こういうファンタジーみたいなのが好きなんだけど。だから彼女と映画見ても、すっげえつまんだよね。つーかこいつ俺のこと財布みたいに思ってるじゃねーの？ チューもさせてくんねーし。

……別れるかなあ。付き合いだした切っ掛けも適当だったし。クリスマスが暇すぎて手当たり次第に電話掛け捲ったらOK貰っちゃって。お互い浮かれてたんだろうな。雪とかちらちら降ってて、クリスマスの魔力で夢みてたんだ。

よし、映画終わったら、言おう。

お、悪の帝王が倒された。そろそろ終わりかな。エンディング。はいはい、感動的だね。はい、御終い。

「えつとさあ、ゆうくん」

今更そんな猫なで声出しても遅いつて。

「今日ありがとね。すごく楽しかった」

「どうも」

「えっと、お礼といっちゃんなんだけどさ」

なんかくれるのか。と思ったら彼女が背伸びしてなんか頬に暖かいものが触れた。

「えっと、はじめてなんだからね」

照れながら言って、一度目をあわせたあとダッシュで逃げていく。
……もう一ヶ月だけ付き合ってみようとか考えてる、俺がいた。

制服 携帯 二乗

シャープペンの擦れて、プリントが捲れる音。期末試験の緊張感
は心地良い。桐山省吾がカンニングしてる。気づいたのは一番後ろ
の席の私だけみたいだ。数学のテストはひたすら難しい。鬼山崎は
手加減を知らない。だいたい数学なんてのは難しくしようと思えば
いくらでもできる科目だ。鬼山崎曰く「これくらいできなくてどう
する？」らしいけど、はつきりいつてはた迷惑だ。高校名というブ
ランド目当てで入学した人たちにとってはかなりの鬼門と成り果て
ている。そういう私は制服がかわいいからこの学校を選んだわけだ
が。

私という人間は不正が嫌いである。

私という人間は桐山が嫌いである。

嫌いの二乗によって生成される方程式は密告となるのか。それと
も何もしないのか。解答用紙を早々に埋め終わった私はなんとなく
省吾とか鬼山崎を見ていて、気がついた。

鬼山崎もカンニングに気づいてる。

期末試験だ。進級に掛かっている。そういう鬼山崎なりの優しさな
のだろう。でもそれなら素直に問題を簡単にしろよ。ばーか。

「それまで」

鬼山崎の声。

回答用紙が回収される。桐山は果たして何問カンニングに成功し
たんだろう。鬼山崎が行ったあとに、直接話し掛けるような中でも
ないからメールして訊こうとした。

ばっちり制服のポケットから携帯を出そうとしている私。

教卓に名簿を忘れて帰って来た鬼山崎。

「佐川」

クマみたいな体格の鬼山崎が超ドスの効いた声で言う。

「は、はい」

「職員室」

「……わかりました」

鬼山崎。なんで桐山に対しては無駄な優しさ發揮してるのに私には厳しいのさ。

あれか？ できの悪い子ほどかわいってか？

わたあめ 傘 トラック

「ふあーあ」

半日ぶつ通しでトラックを走らせた直後は流石にきつい。迷惑だとはわかっていたが、近くにあったコンビニに停めた。2台トラックで居眠りはシャレにならない。事故って俺だけ死ぬならまだいいけど。

うとうとし始めていた時、急に派手な雨音が聞こえてくる。薄目を開ける。結構な勢いで降っている。

「おいおい……。勘弁してくれよ」

無駄に騒がしいオーケストラは俺を寝かしてくれる気がないらしい。仕方ないからコンビニに入って漫画雑誌と缶コーヒー。それから菓子パンを幾つか買う。

雨は止む気配がない。さっさと家に帰りたい。車内に戻って雑誌を眺めながら飯を食う。菓子パンは味は悪くないのだが、冷えている。暖かい飯が食いたい。ああ、今日中に帰るって嫁に言ってしまったことを思い出した。

道の向こうから人の団体がやってくるのが見えた。浴衣を着てたり、カップルだったりする。どうやら祭りがこの雨で流れたらしい。「ごしゅーしょーさま」

生あくびを吐きながら呟く。

その人たちが行ったあと、小学生くらいの子供が相合傘で歩いてきた。二人で一つのわたあめを分け合っている。ガキのくせにめっちゃめっちゃラブラブしてやがる。俺の娘もあれくらいだ。……なんか急に心配になってきた。悪い虫とかついてないかな。

「ユミ。父ちゃんもうひとがんばりするからな」

コーヒーの残りを煽って、俺はアクセルを踏み込んだ。

皋月 ドリル 三角関係

薄赤い皋月の花が咲いていた。皋月というのはツツジ科の植物で、五月頃に咲くのでこの名前がついている。花言葉は「協力を得られる」。

加川美咲は、ぼかして言うと言のガールフレンドだ。久我山忍は美咲が私に内緒で告白した人。で、久我山くんは私が好きらしい。普段は美味しい喫茶店のコーヒーが、雰囲気になされてわからなくなっている。さて、呼ばれたから来てみたものの、私は一体どうすればいいのだろう。というかなんで私を呼んだの？

さつきから、工事している外の道路がやたらとうるさい。何をしているのかわからないが派手な機械音を撒き散らしてドリルが地面を抉っている。マンホールでも作ってるんだろか？ 穴は遠めにも結構深そうに見えた。機材がいろいろ転がってる。

「だからさ、私は久我山くんが好きだからサツキには私と別れて欲しいの」

美咲が言う。聞き取り辛いけどなんとか解読できた。ふーん、へえ。ついに異性に興味持つちゃったかあ。

「僕はサツキさんのことが好きなんだ。僕と付き合って欲しい」
んでなんでそうなるの？ 久我山くん、私がダメって言うたら美咲と付き合うとでも言ったの？

あ、なんか腹の底から怒りが沸いて来た。どうしようかなあ。

「ちょっとトイレいってくるね」

美咲が席を立つ。

久我山くんと二人で席に残される。工事の音で周りに聞こえないのが丁度よかった。

「ねえ、あの穴、結構深いよね」

「え、ああ、うん」

「突き落としたら、すぐに動けないよね」

「え……」

「ああいう機材ってすごく重いんだろ？ 動けないときに降ってきたら死んじゃうかもしれないね」

「そ、そうだね」

「休憩なのかな。工事の人、機材置いたまま行っちゃったね」

「……」

「私のお願い叶えてくれる人なら、付き合ってもいいかも」

美咲が戻ってきた。

「ねえ、美咲。この喫茶店さっきから工事の音がうるさいからさ。

ファミレスかどこか行こうよ」

「……うん」

私達は席を立った。私はそこが喫茶店の中から見えないように立つ。

工事現場を横切る。穴の真横に来たとき、張られたスロープを乗り越させるくらいの勢いで久我山くんが美咲を突き飛ばした。美咲は穴の中に落ちていく。久我山くんは工事用のドリルを掴んで穴に落とそうとした。私はその久我山くんを突き飛ばした。

「二人とも死ね。ばーか」

皐月の花が咲いている。

花言葉は、協力を得られる。

受け 浴衣 折り紙

彼女は俺を見るなり怪訝そうに目を細めた。

「あのさあ、浴衣って女性キヤラだから許されるんじゃないかな？
うなじとかうなじとかうなじとか、中に下着をつけていなかった
りとか、浴衣がすばらしいものだと言うことは否定しないけどね。
君のようなブサ……、失礼、表現を柔らかくしよう。ノットイケメ
ンが身につけても特に意味のあるものじゃないというか、失笑を生
むだけだと思うのだけど」

「的確に刺さる言葉をありがとう。泣きそうだよ」

俺だつて着たくてきてるわけじゃないんだよ、畜生！ 親に夏祭
りいつてくるっていったら無理矢理着せられたんだ。呉服屋の息子
なんかに生まれたくなかったよ！

「いや、まあ馬子にも衣装といふかなんというか、……ごめん。褒
めるところを探してみたけどフォローのしようがなかった。この勘
違い野郎。幼馴染じゃなかったら君と手を繋いで歩くんてありえ
なかったと心底思うよ。

……うーん、なんか普段着で来た僕が悪いみたいに思えてきたじゃ
ないか。相変わらずだけど気の使えない人間だね。そもそも本当に
君は霊長類人科ホモサピエンスかい？」

「生物学的に否定された？！」

「まあ人間だよ。君の父親と母親はよく知っているけど二人とも
君に似てなくていい人だし、君だけ橋の下で拾われてきた子供なん
てことはありえないよね。……多分」

「すいません、そろそろ勘弁してください！」

俺の声はほとんど悲鳴に近かった。彼女はくすくす笑いながら言
う。

「君は折り紙並みにいろんな形に思い通りに曲がるから本当にいいじ

め甲斐があるなあ。……ん、そろそろ始まるかな」

ひゅっ、と風を斬るような細い音がして、夜空に花が咲いた。

「これから僕の様子でいておくれよ」

なんかひどい言われようだけど彼女が笑っているからまあよしとする。

ラグナロック モスコミュール カピバラ

「例えばいまこの瞬間に世界が滅んでしまつとしたら君はどうする？」

返事はなかった。隣に誰も座っていないのだから当然だ。もう何杯目になるかわからない酒を煽る。モスコミュールという甘口のカクテルは彼のお気に入りだ。彼は酔っていた。呂律は怪しく、目はどろりと濁り焦点があっていない。

「神様が怒って人間を滅ぼすんだ。人間もただじゃ死なないんだろうね。せつかく核爆弾なんて作つたんだから、使わない手はない。戦争だ。ラグナロックだ」

おかしそうにクククと低く笑う。

「僕ならふられたばかりの彼女を犯しに行くね。死ぬことが確定してるんだ。それくらいやつても構わないじゃないか」

「さつきから誰と話してるの？」

「あれ？」

「それと私、あなたをふつた覚えがないんだけど」

男の視線の先にはカピバラのぬいぐるみがあった。けれどそれが見えなくなつて、代わりに、酒で冷たくなつた唇に温かい物が触れた。

「浮気？」

微笑みながら女が訊ねた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6491s/>

三題話

2011年4月30日12時55分発行